

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第十四主日(8/22)礼拝

「三本の十字架」

ルカ福音書第23章32節、39節から第23章43節

【聖書】

ルカによる福音書 23:32 ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。33 「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。34 [そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。】人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。39 十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」40 すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。41 我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」42 そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。43 するとイエスは、「はつきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

1 パンデミックの中の希望

昨夜、M.Fちゃんが電話をくれました。「先生、悲惨なニュースばかりで、気がめいます」「どんなニュース?」「新型コロナのニュースです。感染した妊婦さんが入院できずに死産したとか、子どもから感染した親が医師にも診察してもらえなくて死んだ、とか」そうです、本当にそう。最近の東京の人口辺りの新規感染者数は、 δ 株が猛威を奮い混乱を極めた四月のインドを超えたそうです。検査能力もいっばいで実際の新規感染者数は、統計値の8倍近いのではないかと、という学者もいます。首都圏では新型コロナウイルスに感染しても9割の人々が自宅に放置され、悪化しても入院できずに苦しむ方たちが急増しています。国民皆保険の国で、感染しても医療に繋がることができないという傷ましいニュースが次々と報道されます。働き盛りでワクチン接種が終わっていない二十代から五十代、大企業が行う職域接種に漏れた人々、社会を支えてきた人々が感染のリスクにさらされながら働かざるを得ない。一体ここはどんなディストピアなのか、夢も希望もあつたもんじやない、怒りと無力感に苛まれずにはおられません。

しかし、そんな中にも、いえ、そんな中だからこそ、私達は、十字架のイエス・キリストにしっかりと希望を持つことができます。人の希望が途絶え

る所、絶望しかない所、神が賜る真の希望が輝き始めるのだと、今こそ知ることができます。死と罪に囚われた人間には、究極的な希望は持ちようがありませんが、イエス・キリストには希望を持つことができます。それはいったいどんな希望でしょうか。

「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」主イエス・キリストと共に、楽園に生きる命が、私達の希望です。

2 パラダイス

この主の約束の言葉の中の楽園というギリシャ語はパラデソス、英語のパラダイス。新共同訳のひとつ前の口語訳聖書では「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」とカタカナの「パラダイス」がそのまま使われていました。主イエスが「パラダイス」と語られたのは、ここだけです。パラダイスのもともとの意味は、「高い塀や壁をもって囲まれた大きな庭園」。もともとは、昔のペルシアの言葉で、それがギリシャ語に入って来た時には、ペルシア王の宮殿にある庭園を意味するようになっていました。王宮の庭はたいてい高い塀に囲まれ、番兵が立っていて、誰でも簡単に入るわけにはいきません。庶民にとっては、その中がどういうふうなのか分からない、写真などない古代世界、人づてに聞くだけです。ペルシアの王、当時の世界で、最も権力を誇った王が造った庭はどんなに素晴らしいものであろうかと、皆、心に思い描き、憧れを込めてパラダイスと呼んだのでしょう。

この言葉が旧約聖書をギリシャ語に翻訳した時に用いられました。創世記に出て来る「エデンの園」をギリシャ語に翻訳する時に、「パラダイス」と訳したのです。うまい使い方です。罪のために追われてしまった人類が、もう二度とそこに入ることはできなくなった神の庭。そこから追放されて苦労に苦労を重ねている時、ふと思う。「神の掟を破らず、神に造られたままの美しい姿に生きていれば、今頃は素晴らしい楽園で暮らし、喜んで幸せに生きていた筈なのに」。失われた楽園、今は手が届かない、ただ憧れ慕うより他ないような庭をパラダイスと言う言葉で呼んだのです。

やがてユダヤの人たちの中に一つの信仰が生まれます。このパラダイスは、失われた過去に属するだけではない、これから自分達に与えられる所だという信仰です。これから救いに与るところ、死んだ後に行くところ。しかし誰もが行けるわけではありません。神の御心に従って、正しい生活をした者が、このパラダイスの中に迎えられる。そして、そのパラダイスでやがて必ず訪れる神の最後の勝利を待つことができる、と信じられるようになったのです。

主イエスも共に十字架に架かった犯罪人もこのパラダイスの意味を知っていたでしょう。十字架に釘付けされたイエスが、このパラダイスに今日一緒にいる、と十字架に架かった死刑囚に約束するというのは、「あなたは神の御心に沿う正しい人だ」と保証したとも言えます。

3 二人の犯罪人

その死刑囚達は、主イエスを挟んで、一人は右に、一人は左に十字架につけられたうちの一人でした。二人の名前も、二人がどんな罪を犯して死刑を宣告されたかも、ルカは一切語っていません。二人について知らなくてはならぬ事は、主イエスと一緒に十字架についた、という事だけだ、それが全てなのだと言いたいようです。

素っ裸で十字架に磔にされ、何時間続くか分からない死の苦しみが始まる三人の死刑囚。二人の犯罪人は、恥と辱めにまみれ、人間の尊厳は全てはぎ取られて死んで行く自分に絶望していたでしょう。周りには、大勢の人間がいる、しかし、誰一人として自分を助けてくれる者はいない。これ以上の孤独はありません。孤絶と言っていいでしょう。全ての人に見捨てられて滅んで行く。自分の一生を振り返り、「ああ、あの時、どうしてあんな馬鹿なことをしたのか！ どうして神に従わなかったのか、悔やんでも悔やみきれない。正しい人が行くと言うパラダイス、ちょっとだけでも見たかった、だが、それは叶わない」そんな事を想っていたのかもしれない。

神の審きを恐れ、絶望の淵に沈んでいる時、片方の犯罪人は意外な言葉を聞きます。自分の隣で磔になっている男の祈りでした。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」彼は心底驚いた。

「この人は、いったい何者なのか？ 十字架に磔られても、神を父と呼んでいる、しかも、その父なる神に、自分を十字架に釘づけて殺そうとしている者達の為に祈りをささげるとは！ この方は、我々と同じ十字架に釘づけられているのに、まだ神を神として、確かな希望を持ち続けているとは。この方が十字架に架かるような罪を犯す筈がない、十字架上でこのような祈りが出来るとは、真実に正しいお方だ、この方こそ、神が選ばれたメシアであり、真の王だ」そう気づかされた、聖霊がこの犯罪人に働いてくださった、としか言いようがない奇跡が起りました。

しかし、もう一人の犯罪人はイエスに向かい罵り叫びます。「お前はメシアではないか、自分自身と我々を救ってみろ。」死の苦しみを、イエスにぶっつけるような激しい罵りの言葉。だから、主イエスの執り成しの祈りを聴いたもう一人は、たしなめずにはおれません。「お前は神をも恐れぬのか、

同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」主イエスの十字架の意味を語る何とも奥深い言葉です。「神を恐れる」とは、神を神として信じ受け入れるという事。「我々の肉体は今、罪の報いとして人間によって殺されようとしている。しかし、人間は肉体を滅ぼすことはできるが、それ以上は何もできない。真実に人を滅亡させることができるのは、神お一人だ。」「お前は苦しいのだろうか？俺だって苦しい。このお方だって苦しい。我々は、この苦しみを受けて当然の罪を犯した。だが、このお方は違う。このお方の苦しみは、このお方を十字架に架けた者達の罪ゆえだ。この方は、敵の罪の為に苦しみを担い、しかもその敵を赦して、滅ぼさないでください、と父なる御神に祈っておられる、そんなことができるのは、神からのメシアしかいないではないか。そのメシアが我々は同じ刑罰を受けてくださっている。もう死ぬしかない我々だ、このメシアを、神を恐れずしてどうするのか。」彼はそのように必死で罪人の仲間に語り掛け、憎しみの鬼と化した仲間の視線を主イエスに向けさせようと必死です。「どうか、肉体の最後だからこそ、メシアを受け入れ、神を恐れよ」と諭すのです。

彼は、次に、イエスへと向き直り話しかけます。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください。」「わたしを思い出してください。」祈りの言葉です。十字架に釘付けられた救い主への祈り。そして、同時に、悔い改めとイエスがキリストであるという信仰告白でもありました。

人が死にゆく時、何も持って行くことはできません。それどころか、すべてが取り去られます。死にゆく時は、人の知恵が途絶え、力が取り去られる時です。この男はまさに死に行く道を辿っていました。そんな彼にとって、尚望みがあるとすれば、自分の弱さと愚かさの極みまで降りて来て、一緒に刑罰を受けてくださるイエスしかいません。だから、この男は望みの全てを込めて言うのです。「主イエスよ、あなただけです、あなただけが、罪に死ぬしかない私の望みです。あなたがわたしのことを思い出してくださるかどうかということに私の望みが懸かっています。犯罪者の私には『私のことを憶えていて下さい』とお願いし、それが当然だと言う権利も根拠も微塵もありません。ただ、あなたは確かに御国をもたらず權威を持っておられます。そうでなければ、あのような祈りはできません。あなたは必ず神の正義を実現され、この世に神の国の支配を完成させられる。そして、あなたの御国が完成する時、自分のような罪人はあなたが造られる神の正義の支配から排除されるのが当然の者です。

しかし、しかし、本当に厚かましいことだけれども、本来そうしていただ

ける者ではないのは重々承知しているのですが、ただあなたの憐みにのみ縋って願わざるを得ません。できることならば、わたしのことを思い出していただきたい。今、人々から斥けられて死んで行く自分にとって、絶望的な死を遂げなければならない自分にとって、尚望みがあるとすれば、そのあなたの憐み以外の何ものでもないからです。どうか、わたしのことを憶えてください。」罪に絶望したこの犯罪人は、イエスに希望を見出し、祈りました。

すると、主イエスは強い確信をもって、この男に約束します。「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」主イエスは、滅びる他ない罪人をとらえ、「今日」パラダイスへと引き上げる為に、人の滅びの淵まで、弱さと愚かさの極みまで降りて来てくださるのです。

4 教会

されこうべと呼ばれる丘に立った三本の十字架、主イエスを中心として磔にされた二人の犯罪人。この三本の十字架こそ、最初の教会だ、とカール・バルトは説教しました。犯罪人、それも十字架に架かるほどの重罪人が最初の教会のメンバーなんて、それはちょっと極端ではないか、と思う方もいるかもしれません。私も最初はそう思いました。しかし、繰り返しこの聖書の御言葉を聴くうちに、ルカも、自分が仕える教会に伝えられるこのエピソードに、教会の姿を見出だし、福音書に記したに違いないと思うようになりました。それがよく表れているのが、主イエスの約束「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」の「今日」です。「イエス様は十字架の上に亡くなられた日には、葬られて黄泉に降るのではないの？」と思われる方もいるでしょう。使徒信条もそう告白します。

この「今日」という言葉には、甦りの主イエスを知っているルカ教会の信仰が映し出されている、と言えるのだと思います。主の十字架の御前に遜り額ずき、自分の罪を告白し真実に悔い改める時、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」という主の約束を聴く者とされる、それと同時に、自分が神に義とされ、イエスと共に楽園を生きるかのように、この世を生きる者とされていることを知る、という経験を繰り返したルカ教会の確信がここに現れているのではないのでしょうか。厳しい迫害の時代、ローマの官憲から逃げ惑う中、仲間われもあったかもしれない、経済的にも困窮した事もあったかもしれない。疫病も流行った時代です。自分の、他者の、この世の罪に縛られ苦しむ中であって、死に囲まれた時であって、

イエスの十字架を通して神を見上げ続け、確かな希望と力が与えられるという経験を繰り返してきたルカの教会の確信がここに現れているのです。主イエスに生かされる教会、生かされる命、三本の十字架の物語からルカが伝えたかった事ではないでしょうか。

だから、主イエスが約束する楽園とは、死んだ後に行く所だけではありません。今、罪人の自分を十字架に架けて、主イエス・キリストと共に死ぬ時、楽園で主と共に生きるように、この世を生きる者と変えられます。変えられ続けるのです。まさにパウロが「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることに成ると信じます。」という信仰がここに描かれています。

そして、お互いに真の救い主がどのようなお方であるか、十字架と復活の主イエスをさし示し、証しするのが教会の交わりの基本です。誰か優れた信仰者や牧師、役員を指さすのではなく、主イエスを示します。今日の場面でも、死の恐怖にパニックになり罵り喚いた一人の犯罪人を、もう一人の犯罪人が諫めたしなめました。その時、この男は、「この私を見て見ろ。同じ刑罰にあっているのに、お前みたいに往生際悪く喚きはしていないぞ」とは言わなかった。「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」と言って、死の淵まで降りて来られた主イエス・キリストをさし示しました。これぞ教会の姿です。

ペトロをはじめとする使徒たちや他の弟子達の上に聖霊が降り、イエスこそ真のキリスト、神の御子だと気づかされ、自分達も罪赦された罪人であるのだと知り、聖徒の教会がはっきりとした形をとって誕生した聖霊降臨の時より53日も前に、神はされこうべと呼ばれる丘の上に三本の十字架を建て、教会の本質的な姿を示されました。

そして、主イエスは今も生きて働き私たちに、十字架の犯罪人と同じように確かな約束を語りかけてくださいます。いつ語りかけてくださるのでしょうか。今日です。どこで語り掛けてくださるのでしょうか。この礼拝で、です。主イエスの「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」という約束を私たちに聞かせるため、神は、私達を十字架の御前に呼び集め礼拝させてくださるのです。この世にあって、今日、主と共に楽園を生きる者とされる為に、私達はイエス・キリストの十字架の前で礼拝し続けるのです。それが教会です。

5 喜田川悦子先生

先週 8/18、横浜ナザレン教会で葬儀礼拝がささげられた喜田川悦子先生も、この地上にあって、イエス・キリストと共に樂園にある命を生きたお一人でした。主イエスの十字架の御前に集い父なる神を礼拝し続け、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」という言葉を聞き続け、神に与えられた目標を目指してひたすらに駆け抜けたご生涯でした。だからこそ、園児が百人以上の規模の幼稚園で、一人一人を大切にする幼児教育を言葉だけでなく誠実に実践する事ができたのではないのでしょうか。

今日、私達はイエス・キリストの御前に集って来ました。私達もこの犯罪人がそうであったように自分の過ぎし一週間に犯した罪を思い返し、主の御前に深く悔い改めたい、罪の淵まで沈んで下さった主イエスの御前に額づきたい。そして救いの言葉を聞きたいと願います。「あなたは、今日、私と一緒にパラダイスにいる。」イエス・キリストの十字架によって、私達は罪赦された者。だからこそ、この罪の世に生きつつも、主イエスと共に樂園で生きるように歩んで行けます。そして、不安と死への恐怖に怯えている人々に、私達教会しかできない事、言葉と行いでイエス・キリストを指し示していきます。疫病が猛威を奮う町にあっても、主にある希望は決して滅びません、十字架の主と共に樂園で生きるように歩む一週間でありますように、神の守りがありますように、祈り願います。